

県都大分のまちづくり アンケート調査報告書

～にぎわい・緑・歩行者重視の中央通りに支持の声～

平成25年9月

大分経済同友会

要 旨

大分市の中心市街地のあり方を考える際、商店街関係者や交通事業者の意見を聞く場は比較的多く設けられているが、商店街を利用するユーザー・サイドの声を反映する機会は極めて少ない。しかし、こうしたサイレント・マジョリティ（静かな多数派）の声に耳を傾けずして、中心市街地が栄えるはずもない。県都大分は、飲食物販施設の立地する商業都市であると同時に、オフィスの集積する業務都心としての性格を併せ持つ。このオフィス街は主に金融機関から構成され、そこに勤める職員数は1,500人以上。彼らはまちなかで日々働いて所得を稼ぎ、同時に買い物や飲食など、消費者として多大な貢献をしている。

大分経済同友会ではこのたび、彼らを対象にまちづくりのあり方に関するアンケート調査を行った。協力いただいた金融機関は26事業所、職員総数は1,105人で、786人から回答をいただいた（回答率71%）。

回答者の属性を整理すると、彼らは大分市の平均と比べて、男女別では女性、年齢別では若い世代が多い。仕事や子育ての現役世代である彼らは消費意欲が旺盛で、地域経済にとって重要な存在だ。彼らの多くは大分市中心部に居を構え、通勤手段として公共交通、徒歩・自転車を用いる割合が未だ高い。また、彼らの多くは職業人生の大半を大分県内で過ごすなど、県都大分の今後に深い関心を抱いているとみられる。

中心市街地の利用目的を見ると、夕食・飲酒、昼食・喫茶、日常の買い物の割合が特に高く、飲食・物販・サービスの諸分野において、彼らが商店街のヘビーユーザーとなっている姿が浮かび上がる。平日はまちなかで働く彼らの多くは、休日毎月2~3回または週1~2回のペースでまちなかを訪れる。一方で、休日はめったに行かないという回答も比較的多く、二極化の傾向が窺える。

回答者に、現在のまちなかに対する評価を聞いたところ、郊外店に比べて個性的・魅力的な商店が少ない、商店街の品揃えにほしいと思う商品が少ない、買い物以外に楽しい場所が少ないなど、まちなかの商業・サービス業の機能不全を指摘する声が多く寄せられた。休憩できる木陰やベンチが不足している、どこの地方都市にもある画一的な景観で個性を欠くといった都市環境・景観の不備に対する指摘も多い。これに対して、車社会に適応した都市だ、もっと車優先にすべきだとの回答は低位にとどまった。彼らの関心を中心市街地につなぎとめるには、こうした課題への対処が望まれよう。

最後に中央通りのあるべき姿を質問したところ、オープンカフェや屋台が常設されたにぎわいあふれる通りという回答が過半を占めたほか、緑にあふれ休憩場所も多い憩いの通り、人々がゆったりと歩ける歩行者にやさしい通り、子どもや高齢者、障害者にやさしい安心安全でバリアフリーな通り、さまざまなイベントや市民の文化活動が日常的に催されるにぎわいあふれる通りなどの意見も3~4割の支持を得た。一方、自家用車にもっと便利な通りとすべき、現状維持が最適であり手を加える必要はないとの回答は低位にとどまった。旧来の車社会優先から、にぎわい・緑・歩行者重視の中央通りへの転換を望む声が極めて強いことが分かる。

大分市では今年10月より社会実験を行い、中央通りを中心とした公共空間の活用方法を検討すべく、市民提案によるイベントを開催することとしている。残念ながら、このイベント公募からは、今回の調査で要望の多かった飲食事業は除外されている。社会実験の次の段階では、オープンカフェや屋台の出店に対する規制緩和を図り、経済面からのにぎわいづくりも行うことを求めたい。また、あらゆるチャンネルを通じて社会実験の内容を発信し市民の関心を惹きつけること、来街者アンケートを通じてサイレント・マジョリティたる市民の意向を十分に汲み上げた多角的な成果検証を行うこともお願いしたい。

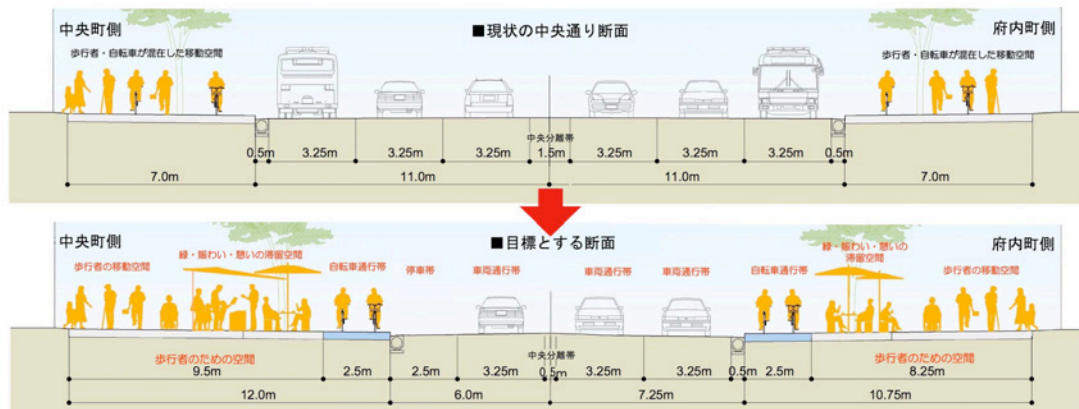
目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. 県都大分のまちづくりアンケートの概要・・・・・・・・	2
2. 回答者の属性・・・・・・・・・・・・・・・・	4
3. 大分市中心市街地の利用状況・・・・・・・・	7
4. 大分市中心市街地の課題と今後の方向性・・・・・・・・	9
5. 社会実験に向けた示唆・・・・・・・・	11
参考資料1 アンケート調査票・・・・・・・・	14
参考資料2 アンケート集計結果・・・・・・・・	15

はじめに

現在、県都大分の都心部は、百年に一度ともいえるべき転機を迎えている。駅南でホルトホール大分やシンボルロードの整備が進み、駅北でも2015年春に駅ビルや県立美術館が開業する。こうした集客施設と商店街の間の回遊性をいかに高めるかが、中心市街地活性化の鍵となる。大分経済同友会（以下、同友会）ではこれまで、回遊性を高めるためには、中央通りを歩行者と公共交通重視の空間とするとともに、県立美術館を核にアートの力でまちなかを再生する「創造都市」の取り組みが重要だと提言してきた¹。

こうした中、大分市は2011～12年にかけて市民意見交換会を開催し、その結果を踏まえてまちづくりのランドデザインを定めた。中央通りはその中で「にぎわいのある、歩いて楽しい人優先の歩行空間と潤いのある緑豊かなメインストリート」と位置づけられている。この目標を実現するため、大分市は下図のように中央通りの車線数を段階的に減らすことを検討しており、第1段階として、2013年10月より中央町側の車線数を一時的に減少させる社会実験を行う。もちろん、歩道が広がっただけでまちなかににぎわいが戻るわけではない。拡張された歩道空間を舞台に、人々がさまざまなイベント・文化活動を繰り広げ、にぎわいを創出することが求められている。そして実験の結果を正しく評価するには、単に中央通りの交通量を計測するだけでなく、こうした取り組みを通じて、まちなかに活気が戻ってくるか、市民の満足度は向上しているかななどを多角的に検証する必要がある。



（出典）大分市「大分都心南北軸整備事業－市道中央通り線の整備計画素案について－」

そうした検証のためには、商店街関係者や交通事業者だけではなく、この大分のまちなかで日々働きながら、買い物や飲食を通じて商店街にお金を落としている方々の生の声を聞き、今後の計画に反映させることが不可欠だと考えた。このため、まちなかに立地する金融機関の経営者・支店長の多くが同友会のメンバーであることに着目し、その協力を得て今般、金融機関に勤務する職員の意見を伺うべくアンケートを実施した次第である。

平成 25 年 9 月

大分経済同友会

代表幹事 小 倉 義 人

代表幹事 梅 林 秀 伍

¹ 大分経済同友会が過去に行った提言の詳細は <http://www.oita-doyukai.jp/teigen/> を参照。

1. 県都大分のまちづくりアンケートの概要

(1) 大分市の中心市街地の現況とアンケート調査対象の位置づけ

大分市調査²によれば、2012年度の大分市の中心市街地における歩行者通行量は、金曜日 13.3 万人、土曜日 14.4 万人、日曜日 13.1 万人となっている。ウィークデイの通行量が休日引けを取らない水準であるのは、県都大分がさまざまな飲食物販施設の立地する商業都市であると同時に、オフィスの集積する業務都心としての性格を併せ持つことに由来する。

中心市街地のあり方を考える際、商店街関係者や交通事業者の意見を聞く場は比較的多く設けられているが、これに比べて、商店街を利用するユーザー・サイドの声を反映する機会は極めて少ない。しかし、顧客満足度を考えない企業経営が成り立たないのと同様に、顧客の声に耳を傾けない中心市街地が栄えるはずもない。そして、まちなかの店舗、特に飲食店の中に、日曜日を定休日とする店が多いことは、オフィス街で働く社員が商店街の顧客として大きな割合を占めることの証左といえよう。

まちなかを一望すれば分かるように、このオフィス街は主に金融機関（銀行、信用金庫、証券会社、保険会社やその関連会社等）の本支店から構成される。中央通りや国道 197 号の沿線など、大分のまちなかに立地するこうした金融機関には、1,500 人以上の職員が勤めている。一見、平日の歩行者通行量 13.3 万人に比較して小さな数字に思われるかもしれないが、そこにはちょっとした誤解がある。ここでいう 13.3 万人とは、大分市中心市街地の 33 地点で定点観測した通行量を合算したものである。例えば、セントポルタ中央町には観測地点が 4ヶ所あり、1 人の人間がアーケードを往復しただけで通行量は延べ 8 人とカウントされる。13.3 万人を 33 地点で除して 1 地点あたりの平均通行量を計算すると 4,032 人に過ぎない。こうした歩行者通行量の規模と対比したとき、職員数 1,500 人というマーケットが中心市街地に対して実に大きな影響力を持つことが分かる³。

このため当調査では、大分市のまちなかで日々働いて所得を稼ぎながら、同時にそこで買い物や飲食など、消費者として多大な貢献をしている金融機関の職員に着目して、アンケート方式による意向調査を行うこととした。

アンケートに際しては、冒頭に記したように、同友会の会員となっている金融機関を中心に調査への協力を依頼するとともに、会員以外の金融機関に対しても一部声がけを行った。この結果、協力いただいた金融機関は、次頁の調査要領に示すように 26 事業所となり、アンケートを配布した職員の総数は 1,105 人にのぼった。

彼らのうち 786 人から回答をいただいたため、回答率は 71%とアンケート調査としては極めて高い水準となり、信頼性のある調査結果を得ることができた。回答率の高さからは、まちなかで働く人々が、県都大分の未来に対して強い関心を抱き、その行方を見守っていることが窺える。

今回の調査に快くご協力いただいた金融機関ならびにそこに勤める職員の皆さまに篤く御礼を申し上げたい。

² 大分市「平成 24 年度 大分市中心部における歩行者通行量調査」による。同調査は、平成 24 年 11 月 16 日（金、晴れ）、17 日（土、雨のちくもり）、18 日（日、晴れ）の 3 日間にわたって行われた。

³ もちろん、金融機関の職員が全調査地点を通行するわけではないから、1,500 人を 4,032 人で割ってシェアを 4 割とするのは推計として乱暴に過ぎる。しかし、内勤の職員でも食事時の外出や通勤（通行量調査は 11～19 時の実施なので通常カウントされるのは退勤時のみ）で複数回カウントされるうえに、営業職の場合はさらに高い頻度でカウントされることを勘案すると、かなりの割合を占めることは確かだろう。

(2) 調査要領

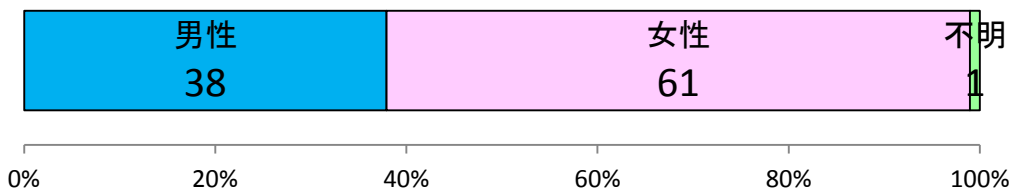
- 調査時点** 2013年8月
- 調査対象** 中央通り、国道197号沿線を中心に大分市の中心市街地に立地する金融機関の本支店（関連会社を含む）のうち、調査に協力いただいた事業所（以下、協力事業所）に所属する職員
- 協力事業所** 以下の26事業所（50音順、敬称略）
伊予銀行大分支店
SMB C日興証券大分支店
大分カード
大分銀行本店営業部
大分銀行大分駅前支店
大分信用金庫府内町支店
大分ファミリー
大分ベンチャーキャピタル
大分保証サービス
大分みらい信用金庫大分支店
大分リース
第一生命保険大分支社
大銀経済経営研究所
大銀スタッフサービス
大和証券大分支店
東京海上日動火災保険大分支店
日本政策投資銀行大分事務所
日本生命保険大分支社
農林中央金庫大分支店
野村証券大分支店
肥後銀行大分支店
福岡銀行大分支店
豊和銀行ホルトホール支店
三井住友銀行大分支店
三井住友信託銀行大分支店
明治安田生命保険大分支社
- 調査方法** 個々の事業所に調査票を配布し、職員に記入していただいた後、回収
- 対象人数** 1,105人
- 回答人数** 786人（回答率71.1%）

2. 回答者の属性

(1) 性別

回答者の性別構成比を見ると、男性が38%、女性が61%となっており、女性の多い職場であることが分かる【図1参照】。

【図1】性別の構成比

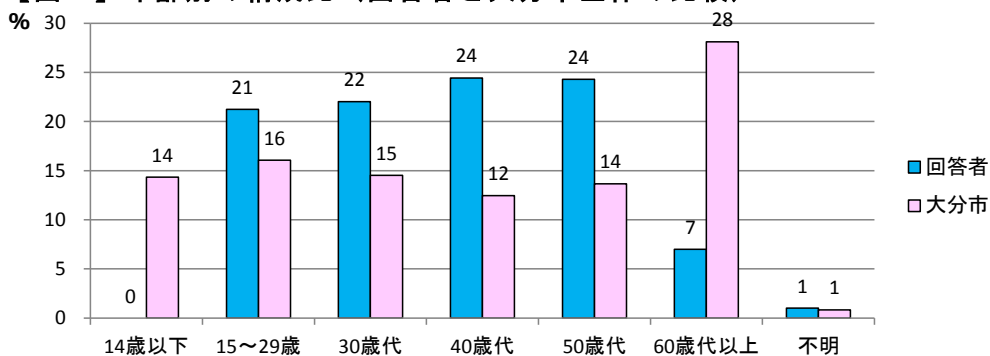


(2) 年齢

回答者の年齢別構成比を見ると、20歳代以下21%、30歳代22%、40歳代24%、50歳代24%、60歳代以上7%となっている。20～50歳代の構成比がほぼ一定であり、60歳代以上の構成比は小さい。大分市平均の人口構成比と比べても若い世代が多く、職員の多くが生産年齢人口（15～64歳）に属している【図2参照】。仕事や子育ての現役世代である生産年齢人口は、老年人口（65歳～）に比べて消費意欲が旺盛であり、まちなかに勤める金融機関職員は人数の絶対規模以上に地域経済に大きな影響を及ぼしていると推測される。

ちなみに、マーケティングの世界では20～34歳の女性をF1層と呼び、消費意欲が特に旺盛で、流行やブランドに敏感であり、自分自身や子どもへの投資を惜しまない層として重視している。当調査の回答者のうち、F1層とおおむね重なる20歳代以下～30歳代の女性は214人で、回答者総数の27%を占める。こうした若い層を商店街のリピーターとして長期的に取り込んでいけるか否かが、今後の中心市街地にとって大きな課題である。

【図2】年齢別の構成比（回答者と大分市全体の比較）



（出典）大分市の年齢別人口構成比は2010年国勢調査による

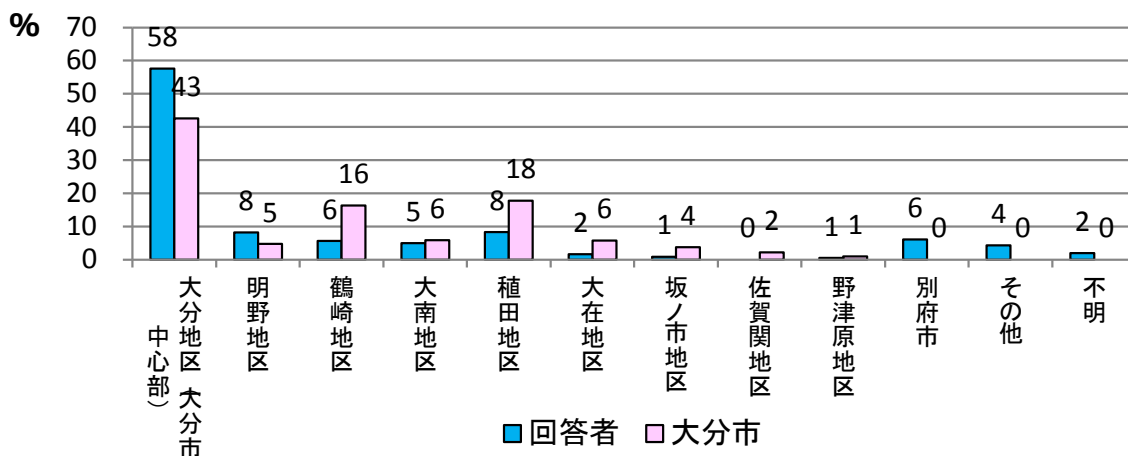
(3) 居住地

回答者の居住地を見ると、大分地区（大分市中心部）が58%と過半を占めている。市内ではそれに次いで、植田地区（8%）、明野地区（8%）、鶴崎地区（6%）、大南地区（5%）

の順となっている。また、別府市に住む職員も6%の割合を占める。居住地は全体的に、大分の中心市街地の近郊に集中しており、大分・植田・明野の3地区で74%を占める。

これに対して、大分市民の居住地は大分地区(43%)、植田地区(18%)、鶴崎地区(16%)の順となっている。市全体としては郊外化が進む中で、アンケート回答者の圧倒的に多くは市中心部に居住している【図3参照】。こうした点からも、オフィス街に勤める社員が中心市街地にとって重要なマーケットであることが分かる。

【図3】居住地（回答者と大分市全体の比較）



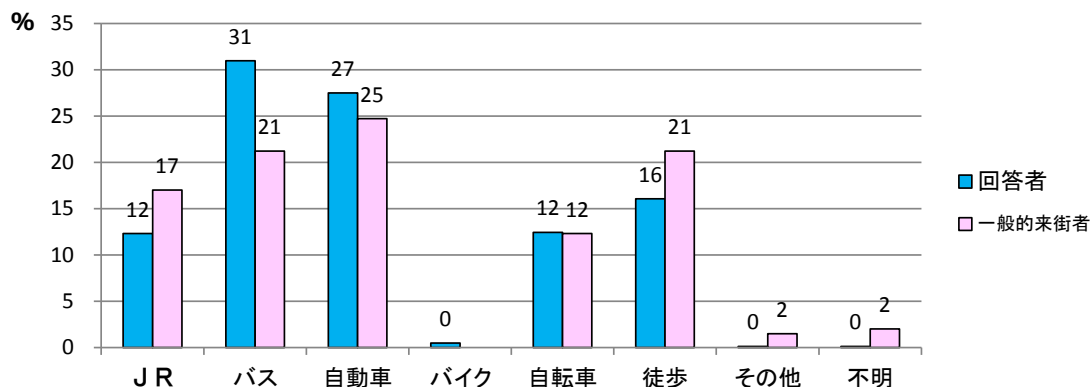
(出典) 大分市の居住地別人口構成比は住民基本台帳人口(平成25年7月末日現在)による

(4) 通勤手段

回答者が自宅から職場まで通勤する際に用いる主な交通手段を見ると、バス(31%)、自動車(27%)、徒歩(16%)、自転車(12%)、JR(12%)となっている。公共交通4割、徒歩・自転車3割、自動車3割という構成である。

通勤者に限らない一般的な来街者の利用交通手段(大分市中心部における通行量調査による)でも、公共交通4割、徒歩・自転車3割、自動車3割という構成は同傾向である【図4参照】。車社会と言われることの多い大分であるが、こと中心市街地では、公共交通、徒歩・自転車という交通手段が依然として高い割合を占めている。

【図4】通勤手段（回答者と大分市全体の比較）



(出典) 一般的来街者の利用交通手段は大分市「平成24年度 大分市中心部における通行量調査」による
 (注) 大分市調査では自転車・バイクを1項目としているため、グラフでは自転車に一括計上した

(5) 転勤有無

金融機関職員には、大分市中心部に立地する現在の職場で勤続する職員と、全国各地を転々とする中で現在は大分で勤務している職員（いわゆる転勤族）がいる。

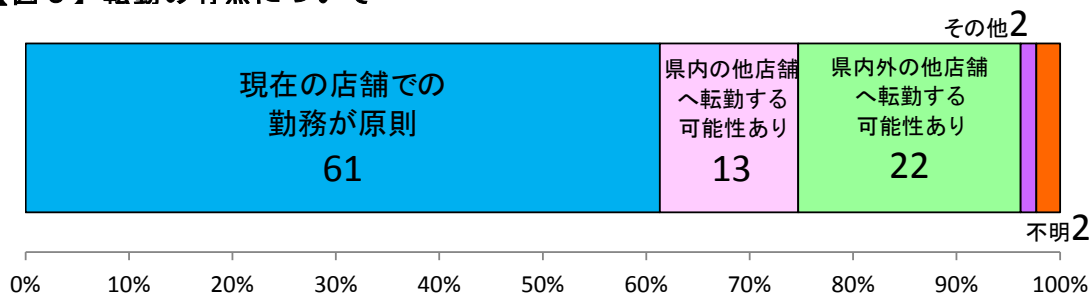
金融機関、特に県外本社の金融機関の支店ともなると、転勤族が多いというイメージを持つ方もいるかと思うが、調査からは異なる結果が得られた。回答者の転勤有無を見ると、現在の店舗での勤務が原則（61%）という回答が最も多く、県内外の他店舗へ転勤する可能性あり（22%）、県内の他店舗へ転勤する可能性あり（13%）と続く。要するに、金融機関職員の74%は、職業人生の大半を大分県内で過ごしているのだ【図5参照】。

彼らは、永年にわたり大分市民、大分県民として県都大分にさまざまなかたちで関わる機会がある。彼らの消費性向や、まちなかの魅力に対する評価は、今後の中心市街地活性化の帰趨を見るうえで極めて重要である。

一方、転勤族は数年サイクルで大分を離れるが、その分だけ在任期間中に大分を満喫しようとする傾向が強い。全国各地の都市を経験した視点から大分の長所・短所を見抜く知見を持ち、また、離任後も大分のファンとして全国に大分の魅力を知らしめてくれる「観光大使」でもある。

ワークライフスタイルの異なる両者であるが、大分市の中心市街地活性化を図るうえでは、等しく重要なステークホルダー（利害関係者）であるといえよう。

【図5】転勤の有無について



(6) 回答者属性の整理

ここまで述べてきた回答者の属性を改めて整理すると、次のようになる。

大分市のまちなかに立地する金融機関の職員は、大分市の平均と比べて、男女別には女性、年齢別には若い世代が多い。仕事や子育ての現役世代である彼らは消費意欲が旺盛であり、地域経済において重要な役割を果たしている。また、彼らの多くは大分市の中心部に住居を構えており、通勤手段として公共交通、徒歩・自転車をを用いる割合が未だ高い。彼らのワークライフスタイルを見ると、職業人生の大半を大分県内で過ごす層が大勢を占める。

このように、まちなかに勤める金融機関職員は中心市街地の重要なステークホルダーであり、彼らの関心を中心市街地につなぎとめておけるか否かが商店街の浮沈の鍵を握ると考えられる。

3. 大分市中心市街地の利用状況

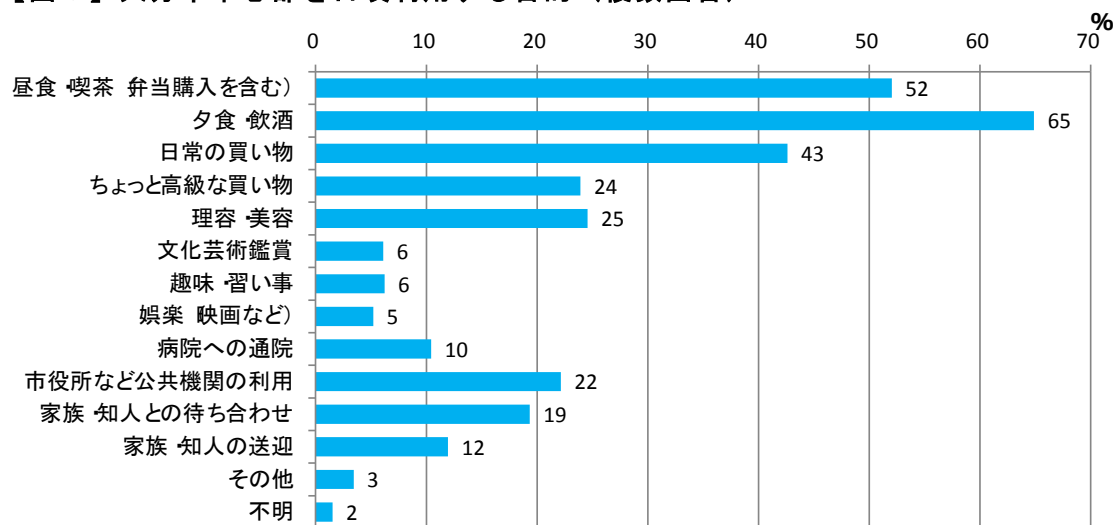
(1) 利用目的

まちなかに務める金融機関の職員は日頃、大分市中心部をいかなる目的で利用しているのだろうか。勤務先で働くためというのが最大の目的なのは当然だが、彼らは仕事のかたわらでさまざまな消費活動等も行っている。彼らはまさに商店街のヘビーユーザーなのだ。

そこで「大分市の中心部（中央町・府内町・都町など）を、日頃どのような目的で利用しているか（勤め先の営業日だけでなく休日も含む）」を質問したところ、利用目的のベスト3は、夕食・飲酒（65%）、昼食・喫茶（52%）、日常の買い物（43%）であった。これらに続くのが、理容・美容（25%）、ちょっと高級な買い物（24%）、公共機関の利用（22%）となっている。飲食・物販・サービスの諸分野において、金融機関職員が商店街のお得意さんとなっている姿が浮かび上がってくる【図6参照】。

大分市の通行量調査でも通行者に来街目的をアンケートしているが、買い物が37%と一番高く、食事・喫茶（昼夜含む）は7%と低位にとどまっている。調査方法が異なる⁴ため単純な比較はできないが、同友会調査で夕食・飲酒、昼食・喫茶が高く出ているのは、回答者が、ほぼ毎日まちなかで時間を過ごしながらか、商店街をいわば「普段使い」しているためではないかと推察される。

【図6】大分市中心部を日頃利用する目的（複数回答）



⁴ 一例を挙げれば、同友会調査では利用目的について複数の選択肢を選べるのに対して、大分市調査では、回答者がその日、中心市街地に来た主な目的を1つだけ選ばせている。

(2) 利用頻度

回答者の多くは、月曜日から金曜日にかけてのウィークデイは毎日、大分市中心部にある勤務先へと通っている。それでは彼らは、仕事のない土曜日、日曜日、祝日といった休日に、どのぐらいの頻度で大分市中心部に出かけているのだろうか。

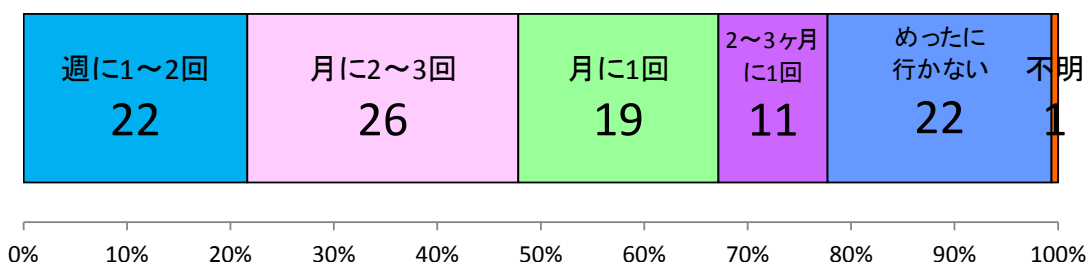
「休日に、大分市中心部へどの程度の頻度で行くか」という質問をしたところ、月に2～3回が26%、週に1～2回が22%と来街頻度は高く、平日のみならず休日にも商店街を利用している姿が明らかになった。一方で、めったに行かないという回答も22%と多く、二極化の傾向が窺える【図7参照】。

大分市の通行量調査でも通行者に来街頻度をアンケートしており、ほとんど毎日(29%)、週に1～2回程度(25%)、月に2～3回程度(18%)、週に3～4回程度(12%)の順になっている。但し、大分市調査が平日・休日を含めた頻度を質問しているのに対して、同友会調査は、平日はほぼ毎日通勤していることを前提として、休日の来街頻度に特化して質問している点が異なっている。要するに、大分市調査の基準に当てはめれば、ほとんど毎日まちなかに来る来街者は、大分市の平均的には29%にとどまるのに対して、金融機関職員ではほぼ100%に達しており、こうした点からも、彼らが商店街のヘビーユーザーであることが分かる。

ここで、利用頻度の二極化傾向について考えてみたい。まず、休日も週1～2回はまちなかに行くと考えたヘビーユーザー170人の内訳を少し詳しく見ていくと、彼らのうち、大分地区の居住者は81%であり、今次調査の全体平均58%【図3参照】を大きく上回る。また、いわゆる転勤族は32%を占め、これも全体平均22%【図5参照】を上回る結果となった。転勤族は、大分市中心部に住む傾向が強く、休日も頻繁にまちなかに出かけ消費を行っている姿が見て取れる。彼らのニーズに対応することは、商店街にとって重要といえよう。

一方、休日はまちなかにめったに行かないと答えた170人を見ると、彼らのうち、大分地区の居住者は40%と全体平均58%【図3参照】を下回り、現店舗で永年勤続する職員は75%と全体平均61%【図5参照】を上回った。比較的まちなかと離れた地区に住み、まちなかの店舗で永年にわたって働く人々の、休日にまでわざわざ出かけたくないという感情には、うなずける部分がある。しかし、平日と休日とで、人々の消費・生活パターンは異なっている。県都の中心部には本来、日常的な消費とは異なるちょっと高級なショッピングや、レジャー・娯楽、家族揃ってのお出かけなど、いわゆる「よそ行き」の需要にも応えられる多彩な都市機能が求められていよう。次頁の調査結果とも関連するが、大分の中心市街地は、そこに勤める会社員の「普段使い」のニーズには対応している一方で、休日に市民がまちなかを満喫するという「よそ行き」の需要を取りこぼしている面があると思われる。

【図7】 休日に大分市中心部へ行く頻度



4. 大分市中心市街地の課題と今後の方向性

(1) 大分市の中心市街地に対する評価

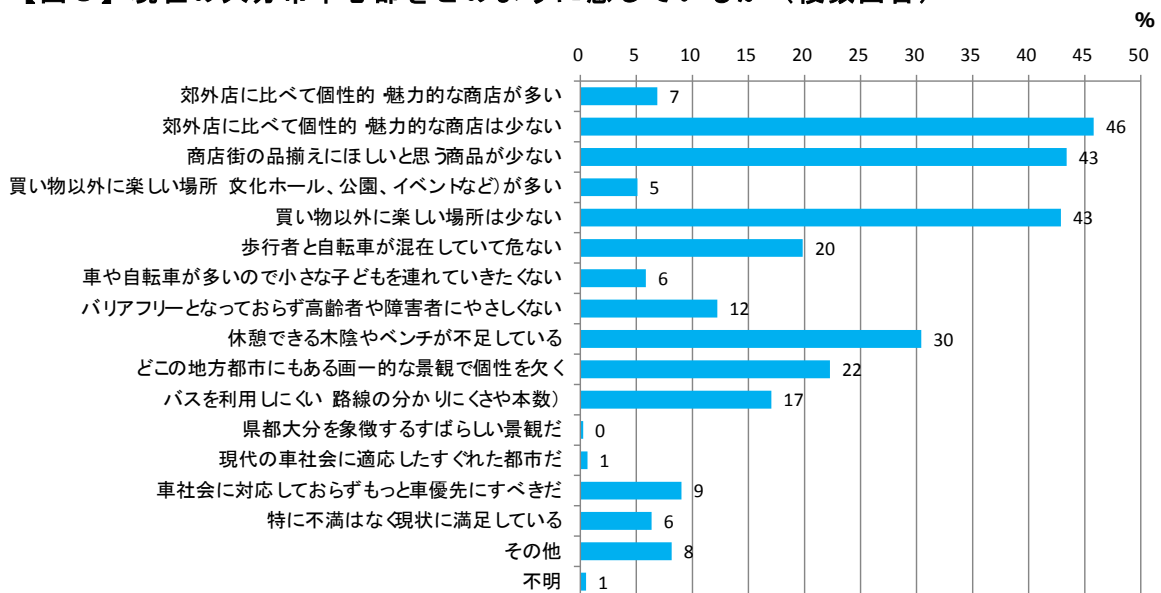
中心市街地のヘビーユーザーである回答者は、現在の大分市中心部の状況に対して、どのような感想を持っているのだろうか。商業面での魅力を感じているのか、商業以外にも多彩な魅力があると感じているのか、交通機関や街路の現況をどのように評価しているのか。

「現在の大分市中心部をどのように感じているか」を質問したところ、郊外店に比べて個性的・魅力的な商店は少ない(46%)、商店街の品揃えにほしいと思う商品が少ない(43%)、買い物以外に楽しい場所は少ない(43%)など、まちなかの商業・サービス業の機能不全を指摘する声が数多く寄せられた。それに続くのが、休憩できる木陰やベンチが不足している(30%)、どこの地方都市にもある画一的な景観で個性を欠く(22%)といった都市環境・景観の不備に対する指摘である。歩行者と自転車が混在していて危ない(20%)、路線が分かりにくく本数が少ないなど、バスを利用しにくい(17%)、バリアフリーとなっておらず高齢者や障害者にやさしくない(12%)といったインフラに関する指摘も一定の支持を集めた。

これに対して、中心市街地への肯定的評価は少なく、例えば、現状に満足しているとの回答は僅か6%に過ぎない。また、車社会に適応した都市だ(1%)、もっと車優先にすべき(9%)との回答は、合わせて10%にとどまった【図8参照】。

まちなかで働く人々の関心を中心市街地につなぎとめておくには、こうした課題への対処が望まれよう。

【図8】現在の大分市中心部をどのように感じているか（複数回答）



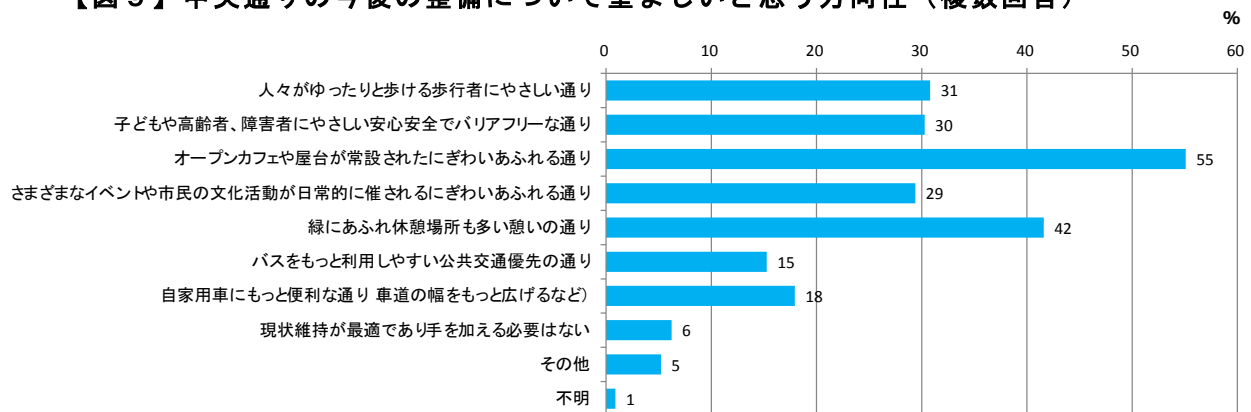
(2) 中央通りのあるべき姿

アンケートの最後の質問は、大分駅前から大分銀行本店前の交差点に至る中央通りのあり方をめぐるものだ。「中央通りの今後の整備について、どのような方向性が望ましいと思うか」という質問に対しては、オープンカフェや屋台が常設されたにぎわいあふれる通りという回答が、実に 55%と過半を占めた。それに次ぐのが、緑にあふれ休憩場所も多い憩いの通り (42%) という回答である。人々がゆったりと歩ける歩行者にやさしい通り (31%)、子どもや高齢者、障害者にやさしい安心安全でバリアフリーな通り (30%)、さまざまなイベントや市民の文化活動が日常的に催されるにぎわいあふれる通り (29%) もそれぞれ 3 割の支持を得た。

一方で、自家用車にもっと便利な通りとすべきとの回答は 18%、現状維持が最適であり手を加える必要はないとの回答は 6%にとどまった【図 9 参照】。

旧来の車社会優先から、にぎわい・緑・歩行者重視の中央通りへの転換を望む声が極めて強いことが分かる。

【図 9】 中央通りの今後の整備について望ましいと思う方向性 (複数回答)



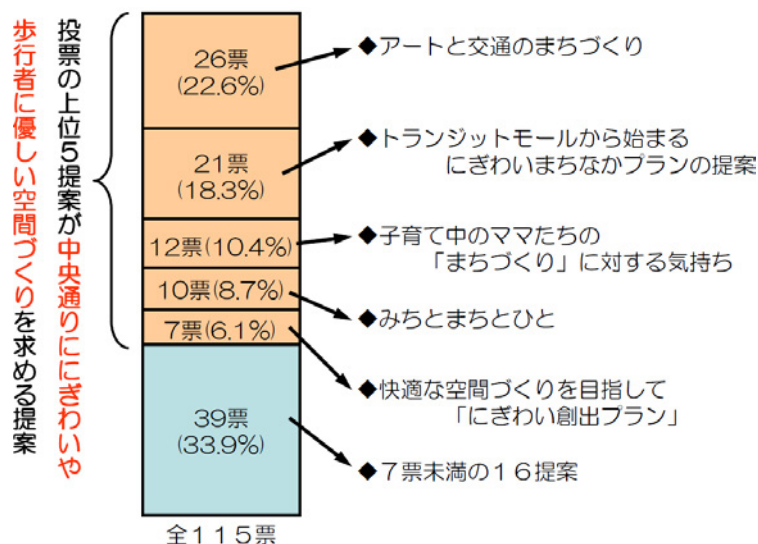
ちなみに、協力いただいた金融機関のうち、中央通りに面する事業所 (一部、中央通り至近に位置する事業所も含む) は 10 事業所あり、回答者数は 341 人にのぼる。集計対象を彼らに絞って中央通りのあるべき姿に関する回答を集計すると、オープンカフェや屋台が常設されたにぎわいあふれる通り (57%)、緑にあふれ休憩場所も多い憩いの通り (40%)、さまざまなイベントや市民の文化活動が日常的に催されるにぎわいあふれる通り (31%)、人々がゆったりと歩ける歩行者にやさしい通り (30%)、子どもや高齢者、障害者にやさしい安心安全でバリアフリーな通り (27%) の順番となった。一方で、自家用車にもっと便利な通りとすべき (18%)、現状維持が最適であり手を加える必要はない (4%) という回答はやはり低位にとどまる。すなわち、中央通り沿いの金融機関職員の考え方は、全体の傾向と同一であることが分かる。

5. 社会実験に向けた示唆

(1) サイレント・マジョリティの声に耳をすます

大分市はこれまで市民意見交換会を10回にわたって開催して、県都大分のまちづくりのあり方について意見を募ってきた。特に第6回意見交換会では、中央通りの公共空間としての活用などをテーマに市民から意見を公募し、21の個人・団体が公開プレゼンテーションを行った。大分市が、その意見交換会に参加した市民に行ったアンケートでは、上位5提案への支持が66%を占め、それらのいずれもが、中央通りににぎわいや歩行者に優しい空間づくりを求める提案であった【図10参照】。このように、意見交換会参加者の間では、県都大分のまちづくりや中央通りのあり方について、一定の方向性が共有されつつあった。

【図10】第6回意見交換会公開プレゼンテーション参加者によるアンケート投票結果



(出典) 大分市「大分都心南北軸整備事業—市道中央通り線の整備計画素案について—」

しかし、こうした会合へ参加する市民は、まちづくりについて自分なりの問題意識を持つ人々や中心市街地の利害関係者などが、どうしても中心となりがちである。もちろん、そうした場を持つこと自体はたいへん重要であるが、まちづくりの最終的な成否の鍵を握るのは、こうした会合には必ずしもやって来ないが、日々まちなかを訪れ、そこで消費・生活を行うサイレント・マジョリティ（静かな多数派）の皆さんである。まちなかに対する彼らのニーズやウォンツを無視した中心市街地活性化は必然的に失敗するであろう。

今回のアンケート調査は、こうした人々の意見を拾う試みの一環である。その結果はすでに述べたとおりで、中央通りをにぎわい・緑・歩行者重視の空間とすべきだという意見が大勢を占めた。前世紀型の車社会に対して、21世紀型のコンパクトシティが選ばれたといえよう。そしてこの方向性は、市民意見交換会に集った方々の意見とも共通し、さらに、今年10月から開始される社会実験「まちなかにぎわい実証実験」とも軌を一にしている。

大分市では、この社会実験を通じて、中央通りを中心とした公共空間の活用方法を検討

するために、市民提案によるイベントを開催することとし、その公募から事業実施までを大分まちなか倶楽部に委託した。中央通りでイベントや市民の文化活動を行いにぎわい創出を図ることに対しては、アンケート回答者からも期待の声が寄せられており、かかる取り組みを着実に実行していくことが求められる。

（２）次の段階ではオープンカフェや屋台の導入を

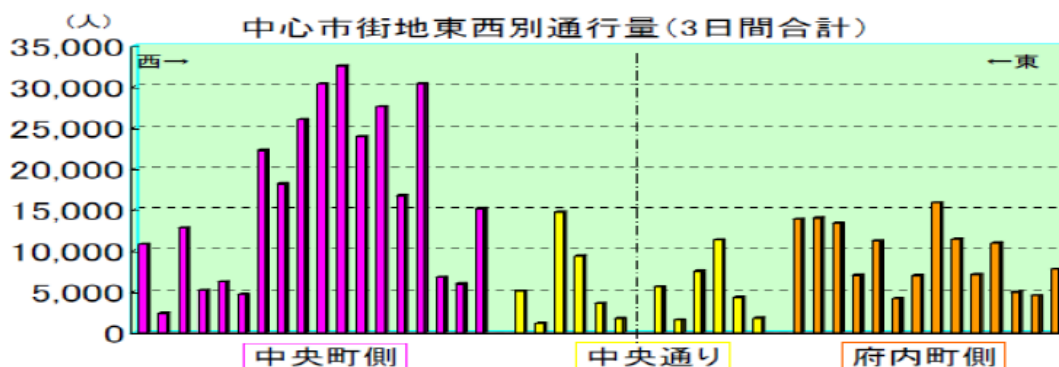
一方で、今回の社会実験では対応できていない要望もある。今回の調査では、中央通りの望ましいあり方として、オープンカフェや屋台が常設されたにぎわいあふれる通りという回答が最も多く、過半（55%）を占めたが、今次実験のイベント公募からは飲食事業が除外されている。今回はやむをえないにしても、社会実験の次の段階では、オープンカフェや屋台の出店に対する規制緩和を図り、経済面からのにぎわいづくりも行う必要がある。

市民活動によるにぎわいづくりというコミュニティデザインの思想は重要だが、そうした活動は必ずしも無償に限られるものではない。むしろ、こうした活動がその場限りのイベントに終わることなく持続可能な取り組みとなっていくためには、収益を上げて安定的な財政基盤を確立することが不可欠となろう。そうした点からも、中央通りにおけるオープンカフェや屋台の常設を検討していくことが重要である。

政府においても、都市再生特別措置法の中で、公共空間を用いたにぎわいづくりのためにオープンカフェの立地規制を緩和するなどの施策を講じており、こうした取り組みはわが国のスタンダードともなりつつある。さらに近時の報道⁵によれば、政府は、これまでの郊外拡張型の都市づくりを転換し、郊外から中心部へと都市機能の集約を促すコンパクトシティを強力に支援する方針であるという。コンパクトシティへの転換は、人口減少・高齢社会となったわが国における、成長戦略の大きな柱といえよう。

大分市中心市街地の歩行者通行量を見ると、中央町、府内町に比べて中央通りの通行量は少なく、東西の商店街のにぎわいが中央通りで分断されていることが分かる【**図 1 1 参照**】。商店街の魅力向上を図るうえで、中央町・府内町個々の取り組みでは効果は限定的であり、両町が中央通りを介して一体化し、中心市街地全体の魅力を発信し、駅周辺と商店街という南北の軸に加えて、東西方向の回遊を生むことが不可欠と考える。

【図 1 1】平成 23 年度の歩行者通行量調査ポイント別の状況



(出典) 大分市「大分都心南北軸整備事業—市道中央通り線の整備計画素案について—」

このように、中央町・府内町・駅ビルのトライアングル（三角形）での回遊性創出が鍵

⁵ 2013年8月25日付日本経済新聞第1面「地方都市 高齢対応型に 病院や商業施設 中心部に集約」

であり、社会実験はそのために中央通りがいかなる形状であることが望ましいかを探るための手段だ。その際、歩道が拡幅されただけで中央通りがにぎわいであふれるわけではない。ハードの整備だけではなくソフト面での利活用のあり方こそが重要であり、中央通りの物理的バリアと同時に心理的なバリアを下げる必要がある。今回の調査では、そうした活用法としてオープンカフェ、屋台が大きくクローズアップされたといえる。

屋台を並べるといっても、別に縁日のように中央通りを屋台でいっぱいにはしたくないわけではない。飲食スペースの量的な確保が目的ではなく、東西を「つなぐ」インパクトあるスポットを中央通りに複数生み出すことがポイントなのだ。そのためには、縁日のそのような画一的な屋台ではなく、デザイン性を重視してセンスがよく、それぞれがオンリーワンといえるような屋台群が望ましいかもしれない。

そうしたスポットができることで、中央町や府内町から中央通りに出てみようという人の動きが生まれ、ついでに中央通りを渡って反対側の街まで足を伸ばしてみようという流れにつながることを期待される。

(3) 社会実験の周知と多角的検証の必要性

同友会では今回、まちなかの金融機関に勤める職員という切り口から、中心市街地の重要なステークホルダーである消費者・生活者としての市民の意向を探った。県都大分の活性化を図っていくうえでは、こうしたサイレント・マジョリティの声をさらに広範に汲み上げ、社会実験に活かしていくことが不可欠である。

こうした観点から、大分市、まちなかにぎわい実証実験協議会、大分まちなか倶楽部、そして実験の舞台となる商店街に対しては、次のことをお願いしたい。

第一に、社会実験に対する市民の認知度は未だ低いものとどまっている。あらゆるチャンネルを通じて、社会実験の内容、とりわけその意義・目的を情報発信し、市民の関心を中心市街地へ惹きつけてほしい。市民の認知がなければ彼らのニーズが顕在化することはなく、社会実験の成果を正しく評価することは不可能となる。

第二に、社会実験の成果については、多角的な検証を行うことが極めて重要である。そしてこれまで繰り返し述べてきたように、中心市街地を利用する人々の意見こそ最重視すべきである。そのためには、商業者、交通事業者だけではなく、中心市街地への来街者の意向、満足度について、しっかりとしたアンケート調査と分析を行っていただきたい。こうした検証なくしては、大分市や協議会として、社会実験に多額の予算を投じたことのアカウンタビリティ（説明責任）を果たしえないといえよう。

同友会としては、今後とも県都大分のまちづくりについてモニタリングと研究を重ねるとともに、必要に応じてさらなる調査・提言を行ってまいりたい。

参考資料1 調査票

問1 あなたご自身のことについて、お伺いします。当てはまる番号1つに○を付けてください。

- 性別： 1 男性 2 女性
年齢： 1 20歳代以下 2 30歳代 3 40歳代 4 50歳代 5 60歳代以上
居住地： 1 大分地区（大分市中心部） 2 明野地区 3 鶴崎地区 4 大南地区
5 植田地区 6 大在地区 7 坂ノ市地区 8 佐賀関地区 9 野津原地区
10 別府市 11 その他
通勤手段： 1 JR 2 バス 3 自動車 4 バイク 5 自転車
6 徒歩 7 その他（ ）
※ 複数の通勤手段を使っている場合、主なものを一つだけ選んでください。
転勤有無： 1 現在の店舗での勤務が原則 2 県内の他店舗へ転勤する可能性あり
3 県内外の他店舗へ転勤する可能性あり 4 その他（ ）

問2 大分市の中心部（中央町・府内町・都町など）を、あなたは日頃どんな目的で利用していますか（勤め先の営業日だけでなく休日も含みます）。よく利用する目的の番号すべてに○を付けてください。

- 1 昼食・喫茶（弁当購入を含む） 2 夕食・飲酒 3 日常の買い物
4 ちょっと高級な買い物 5 理容・美容 6 文化芸術鑑賞 7 趣味・習い事
8 娯楽（映画など） 9 病院への通院 10 市役所など公共機関の利用
11 家族・知人との待ち合わせ 12 家族・知人の送迎 13 その他（ ）

問3 休日に、大分市中心部へどの程度の頻度で行きますか。当てはまる番号1つに○を付けてください。

- 1 週に1～2回 2 月に2～3回 3 月に1回 4 2～3ヶ月に1回 5 めったに行かない

問4 現在の大分市中心部をどのようにお感じですか。当てはまる番号すべてに○を付けてください。

- 1 郊外店に比べて個性的・魅力的な商店が多い 2 郊外店に比べて個性的・魅力的な商店は少ない
3 商店街の品揃えにほしいと思う商品が少ない
4 買い物以外に楽しい場所（文化ホール、公園、イベントなど）が多い
5 買い物以外に楽しい場所は少ない 6 歩行者と自転車が混在していて危ない
7 車や自転車が多いので小さな子どもを連れていきたくない
8 バリアフリーとなっておらず高齢者や障害者にやさしくない
9 休憩できる木陰やベンチが不足している 10 どの地方都市にもある画一的な景観で個性を欠く
11 バスを利用しにくい（路線の分かりにくさや本数） 12 県都大分を象徴するすばらしい景観だ
13 現代の車社会に適応したすぐれた都市だ 14 車社会に対応しておらずもっと車優先にすべきだ
15 特に不満はなく現状に満足している 16 その他（ ）

問5 中央通り（※ 大分駅前から大分銀行本店前の交差点までの道路）の今後の整備について、どのような方向性が望ましいと思いますか。当てはまる番号すべてに○を付けてください。

- 1 人々がゆったりと歩ける歩行者にやさしい通り
2 子どもや高齢者、障害者にやさしい安心安全でバリアフリーな通り
3 オープンカフェや屋台が常設されたにぎわいあふれる通り
4 さまざまなイベントや市民の文化活動が日常的に催されるにぎわいあふれる通り
5 緑にあふれ休憩場所も多い憩いの通り
6 バスをもっと利用しやすい公共交通優先の通り
7 自家用車にもっと便利な通り（車道の幅をもっと広げるなど）
8 現状維持が最適であり手を加える必要はない 9 その他（ ）

自由意見欄

ご協力ありがとうございました。

参考資料2 アンケート集計結果

問1 回答者の属性

性別			年齢					
男性	女性	不明	20歳代以下	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	不明
298	480	8	167	173	192	191	55	8

居住地												
(大分市中心部)	大分地区	明野地区	鶴崎地区	大南地区	植田地区	大在地区	坂ノ市地区	佐賀関地区	野津原地区	別府市	その他	不明
453	64	44	39	65	13	7	0	4	48	34	15	

通勤手段								転勤有無				
JR	バス	自動車	バイク	自転車	徒歩	その他	不明	勤務が原則現在の店舗での勤務あり	県内の他店舗へ転勤する可能性あり	県内外の他店舗へ転勤する可能性あり	その他	不明
99	249	221	4	100	129	1	1	482	105	169	12	18

(注) 通勤手段については、主なものを1つ選択する設問であったが、一部に選択肢を複数選んだ回答者がいた。構成比については、複数を選択した回答も有効回答と扱って計算した。

問2 大分市中心部を日頃利用する目的（複数回答）

(弁当購入を含む) 昼食・喫茶	夕食・飲酒	日常の買い物	ちよつと高級な買い物	美容・美容	文化芸術鑑賞	趣味・習い事	娯楽（映画など）	病院への通院	公共機関の利用	市役所など	待ち合わせ	家族・知人との	家族・知人の送迎	その他	不明
409	510	335	188	193	48	49	41	82	174	152	94	27	12		

問3 休日に大分市中心部へ行く頻度

1週に 2回	2月に 3回	月に 1回	2 3ヶ月 に1回	めったに 行かない	不明
170	206	152	83	170	5

問4 現在の大分市中心部をどのように感じているか（複数回答）

郊外店に比べて個性的・ 魅力的な商店が多い	郊外店に比べて個性的・ 魅力的な商店は少ない	商店街の品揃えにほしいと 思う商品が少ない	買い物以外に楽しい場所（文化ホー ル、公園、イベントなど）が多い	買い物以外に 楽しい場所は少ない	歩行者と自転車 が混在して危ない	車や自転車が多いので小さな 子どもを連れていきたくない	バリアフリーとなっておらず 高齢者や障害者にやさしくない
54	360	341	40	337	156	46	96

休憩できる木陰や ベンチが不足している	どこの地方都市にもある 画一的な景観で個性を欠く	バスを利用しにくい （路線の分かりにくさや本数）	県都大分を象徴する すばらしい景観だ	現代の車社会に 適応したすぐれた都市だ	車社会に対応しておらず もっと車優先にすべきだ	特に不満はなく 現状に満足している	その他	不明
239	175	134	2	5	71	50	64	4

問5 中央通りの今後の整備について望ましいと思う方向性（複数回答）

人々がゆったりと歩ける 歩行者にやさしい通り	子どもや高齢者、障害者にやさしい 安心安全でバリアフリーな通り	オープンカフェや屋台が常設された にぎわいあふれる通り	さまざまなイベントや市民の文化活動が 日常的に催されるにぎわいあふれる通り	緑にあふれ休憩場所も多い憩いの通り	バスをもっと利用しやすい 公共交通優先の通り	自家用車にもっと便利な通り (車道の幅をもっと広げるなど)	現状維持が最適であり 手を加える必要はない	その他	不明
242	238	433	231	327	120	141	49	41	7

問い合わせ先：大分経済同友会

〒870-0021 大分市府内町3丁目4-20 大分恒和ビル3F
電話：097-538-1866 Eメール：info@oita-doyukai.jp